

校長 田邊 道行

春日山神社と澄晴さん

「ここは、どこでしょう？」2月の全校集会で、右の写真を提示して子どもたちに尋ねました。

さすが春日小学校の子どもたちです。すぐに「春日山神社」と答えが返ってきました。そこで、次の質問です。

「春日山神社は、誰をまつるために建てられた神社でしょうか？」この質問にも、すぐに「上杉謙信公」と正しい答えが返ってきました。

さて、今度は少し難しい質問です。

「上杉謙信公は、今から 500 年くらい前に活躍しましたが、この春日山神社が建てられたのは何年くらい前でしょうか。次の4つから選んでください。」

ア 1604年（今から421年前）江戸時代が始まってすぐ

イ 1703年（今から322年前）5代将軍綱吉の頃

ウ 1802年（今から223年前）江戸時代の終わり頃

エ 1901年（今から124年前）明治時代 春日小学校ができてから

皆さんは分かりましたでしょうか。子どもたちには、予想した答えを挙手で教えてもらいました。最も多かったのは、「ウ」でしたが、本当の答えは「エ」です。

春日山神社は、明治34年に旧高田藩士の小川澄晴さん（右の写真）が寄付を募り、建てた神社です。

ただ、この日は澄晴さんではなく、澄晴さんの子ども「健作さん」の話をしました。 小川澄晴さん



春日山と健作さん

健作さんは、高田で生まれ育ちましたが、中頸城尋常中学校（今の高田高等学校）に進学した頃、お父さんの澄晴さんが春日山神社を建てる仕事を始めたため、家族で春日山に引っ越しました。そして、春日山から高田の学校に通うことになりました。学校の行き帰りに見たふるさとの自然から、健作さんは、自然の美しさや限りある命のはかなさなど、大切なものを学びました。

冷たい雨が降る秋の終わり、健作さんがさびしい田舎道を通ると、木の陰で貧しそうなおんなの人が小さい子どもと抱き合うようにしていました。二人の足は裸足で、冷たそうに赤くなっていました。おなかがいっぱい食べてもおなかがすいてもおなかいっぱいに食べることもできない様子や、寒くても暗い中で縮こまって寝なければいけない様子を想像して、健作さんの心は、うずくように痛みました。



小川健作さん

また、ある夏の暑い日のことです。女の人が背中にびっしょり汗をかいて、大きな荷物をいっぱい積んだ荷車を、まるで地面を這うようにして引いている姿を見ました。小さな体でこんなにもつらい仕事をしなければいけないのか…と健作さんは、人の痛みを自分の痛みとして感じ、お金があるなしで人の幸せが大きく左右されるような世の中に対して強い疑問をもつようになりました。

そして、明治34年、春日山神社ができた年に、健作さんは東京専門学校に入学しました。今の早稲田大学です。そこには、小説や評論で有名な坪内逍遙先生（右の写真）がいました。健作さんは坪内先生に習い、大学3年生の時に「漂浪児」という短い小説を発表しました。この小説は、家族を失った若者が、幼い頃に分かれた姉を探して旅に出るお話で、上越の地名がたくさん登場します。

この作品が発表される時、坪内逍遙先生は、健作さんに「未明」という名前をつけてくれました。未明というのは、夜明け前のかすかな光が射すときのことで、「これから明るい光が差し込んでくる」という意味が込められています。

それ以降、健作さんは「小川未明」と名乗るようになりました。
作家「小川未明」の誕生です。

未明さんは、文学には人を変え、世の中を変えていく力があると信じ、世の中に対して抱いた疑問や自分の気持ちを多くの作品で表現しました。さびしい子どもやひどい扱いを受けて苦しむ人々が、特別な力によって救われる童話が数多くあります。未明さんは、童話を通して人々に希望と愛を与えようとしました。79歳でお亡くなりになるまで50年以上にわたって約1200もの童話を世に送り出し「日本のアンデルセン」と呼ばれたり、「日本児童文学の父」と呼ばれたりしています。



坪内逍遙さん

小川未明さんと春日小学校

ここまで話してから、子どもたちに聞いてみました。

「小川未明さんの名前を聞いたことがある人、手を挙げてみてください。」→たくさん手が挙がりました。

「未明さんの童話を読んだことがある人はいますか。」→これも、多くの手が挙がりました。

今年度、上越文化会館で開催された小川未明童話感想文コンクールで3年生の須貝遥さんが素晴らしい賞を受賞したことを紹介し、「小川未明さんの童話を読んでみましょう」と呼び掛けました。

ここで話を終えてもよかったのですが、さらに、小川未明さんと春日小学校のつながりについて話しました。未明さんの父、澄晴さんが建てた春日山神社の境内には未明さんの詩碑があります。

雲の如く高く くものごとくかがやき 雲のごとくとらわれず

未明さんの目指す生き方が感じられる詩です。また、未明さんの母校である大手町小学校には、名作「野ばら」を記念する文学碑があります。

ただ、あまり知られていませんが、もっと貴重な詩碑が上越市にはあるのです。「今は、雪の下になっていますから、春にならないと見ることはできないのですが…」と前置きをして、夏の写真を提示しました。それは、春日小学校の体育館入り口付近の写真です。

ここに、小川未明さんの貴重な詩碑があるのです。



春日山神社の詩碑

春日小学校の詩碑には、次の詩が刻まれています。

雪やみて 木は黙し 鳥飛んで 海とおく鳴れり 未明

雪がやんだ直後の静かさから始まり、木々は動かず静かに立ち尽くしています。その様子から、自然の静けさへの敬意が感じられます。鳥が飛ぶことで、静けさの中で生命の動きが突然加わります。最後に遠くの家からかすかな音が聞こえてきて、静けさの中に響く自然の音が、全体に広がる余韻を与えます。

静と動、近くと遠く、沈黙と音という対比が見事に表現されている詩です。

この素晴らしい詩碑は、春日小学校の宝物です。



夏の日の春日小学校の詩碑

この詩碑が設置された翌年、春日小学校では子どもたちが未明さんの作品「赤い蝋燭と人魚」の劇を発表しました。劇は新聞にも取り上げられ、記事と写真をご覧になった未明さんが、春日小学校にはがきを送っていただきました。写真やはがきは、校長室にあります。



最後に、子どもたちに話しました。

この「赤い蝋燭と人魚」を未明さんが発表したのは、ちょうど2月でした。

そして、もうすぐ3月です。3月は、今年度最後の月であり、新年度の準備の月にもなります。

小川澄晴さんが春日山神社を建てたのも、小川未明さんが世の中を変えようとたくさんの童話を作ったのも、チャレンジすることを自分で決めて行動したからです。皆さんも、今、この時期に「来年度は、こうしよう！」「4月からは、こうなりたい！」という思いをもっていますか。来年度まで残り1か月です。未明さんの詩碑が雪の下から現れるまでに、自分のチャレンジしたいことをしっかりと考えておきましょう。

さて、全校集会でこの話をしてから1か月です。

右の写真のように、詩碑が雪の下から現れました。

本日、終業式を迎え、本年度も残すところ、卒業式のみとなりました。子どもたちは、来年度に向けてチャレンジしたいことを見つけたでしょうか。

本年度も保護者の皆様、地域の皆様にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

